

駒澤大学仏教文学研究所公開講演会録

『源氏物語』と仏教

— 経文と仏教故事と仏教語の表記 —

三 角 洋 一

はじめに

面はゆいご紹介をいただいて恐縮です。まるで三題噺のような副題をつけてしまいました。これから幾つかいろいろなことを話題にいたしますので、時間内に要領よく説明できるかどうか自信ないこともあって、あらかじめ全体の概要を述べさせていただきます。

私の関心事の一つとして、平安時代の貴族社会の男性、女性は仏教とどの程度深くかかわっていたのかということがあって、これを出発点として、彼らの精神生活とその文化的所産の内実を探ってみようということがありました。本日は、そのうちで和文（漢字交じり平仮名文）の表記上の制約とその克服という視点から、一〇世紀末ごろから一二世紀までにわたって、『源氏物語』とその周辺の物語や古注釈を資料として、それらを読み込むことによって二つ

の展望を果たしたいと思えます。

おもな資料としては二〇〇八年前後に成立した『源氏物語』、一〇三〇年ごろの『栄花物語』の正編三〇巻、一〇七〇年ごろの『狭衣物語』、それからちよつと飛んで二七五年以前に作られた『源氏物語』の最初の注釈書『源氏釈』がありますが、いずれも現存するテキストは最も古くて二二〇〇年ごろの写本しか遺っておりません。しかしながら『源氏物語』の場合には、物語の古写本やさまざまな古注釈書を見比べることによって、二二〇〇年ごろの『源氏物語』の表記の一部や『源氏釈』の原態が分かるのです。これらの資料を繋ぎあわせて考察すれば、院政期ないし鎌倉初期の和文においては漢詩文や経文ないし仏教語がどのように表記されていたのかが推測されるので、いくつかの文化史的に重要な事実が明らかになるのです。

一つには、『源氏物語』の作られた時代は、末法の世を五〇年以内に迎える像法の世の最末年にあたり、救済を求めて『往生要集』が著され、藤原道長により仏法興隆が進められた時代であることが明らかになります。二つめは『源氏物語』では仏教語も仮名書きされることが多かったこと（貴顕に献呈する清書本では漢字に振り仮名を付すか、平仮名に振り漢字することがあったかもしませんが）、三つめは、物語では『栄花物語』『狭衣物語』になつてようやく経文の引用が見られるようになること（九八四年成立の源為憲撰『三宝絵』には存在したかもしませんが）、四つめは、『源氏釈』には物語本文の出典となった漢詩文や経文などの原文の引用があり、平仮名による訓読文を併記する方法がとられていたに違いないこと、などといった様相が挙げられます。

本題にはいつて、さうすぐ以上のことを具体的に見ていくことにいたしましょう。

一 王朝貴族女性と仏教

はじめに、平安時代摂関期の貴族社会における仏教の普及浸透についてですが、これまで私は、紫式部の仏教理解があまりに深いものですから、貴族の男性も女性もその気になれば經典を論疏とともに学ぶことは容易であったし、多くの仏教知識を身につけていたに違いないと思っていました。しかし最近になって、どうやら『源氏積』の著者藤原伊行は仏教故事をおそらく師とする僧に問い合わせ、勘文を得て注釈に載せたらしく、『源氏物語奥入』の著者藤原定家は『孟蘭盆経』だけは見併せているが、あとは伊行の注釈に従っていることに気づきました。二人とも仏教関係のことについては、生半可な知識を振り回すことはしていないのでした。今は、次のように考えています。

多くの貴族は『法華経』『阿弥陀経』『般若心経』など少数の読誦用經典と要法文のようなものを持経としていたようです。皆それぞれにしかるべき僧と師檀の関係を結んでいて指導を受けたり相談したりするが、論疏にわたってしっかりと学ぶのでなく、講会などにおける耳学問が中心であったのではないかと思われまます。また一般論として学者・文人のほか、天皇・皇族・摂関家子弟は特別で、学ぶことがあったに違いないようです。

いちおう仏教のたしなみのある女性の著述を見ますと、一〇〇一年ごろの清少納言『枕草子』の角川文庫本の第一九八段には、

経は、法華経。さらなり。普賢十願。千手経。随求経。金剛般若。葉師経。仁王経の下巻。

とあり、第一九九段には、

仏は、如意輪。千手。すべて六観音。薬師仏。釈迦仏。弥勒。地藏。文殊。不動尊。普賢。

とあります。一〇二二年の大齋院選子内親王による『発心和歌集』は、

四弘誓願、般若心経、普賢十願、転女成仏経、如意輪経、阿弥陀経、理趣分、仁王経上下卷、本願薬師経、寿命経、無量義経、法華経二十八品、観普賢経、涅槃経、普回向文

にもとづく五四の法文題で詠んだ釈教歌集で、彼女の四九歳の厄年にあたっての試みでした。ちなみに、本年秋の中古文学会大会の研究発表要旨の中に、『発心和歌集』は赤染衛門の企てたものと改めねばならないとする新説を見かけましたが、私は現時点では、そちらのほうが誤伝ではないかと思っています。

二 『源氏物語』の作られた時代

ここで少し視点を変えて、紫式部、清少納言、選子内親王はどのような時代を生きていたのか、簡単な仏教文化史年表を作成して見てみることにしましょう。だいたい一条天皇（在位九八六～一〇二一）の時代から白河院政期のころまでとして、私の興味を持っている事項をリストアップしてみました。

○九八四 源為憲『三宝絵』 *尊子内親王に献呈

*は女性ないし女性向け

☆ 慶滋保胤『日本往生極楽記』

☆○九八五 源信『往生要集』 他に『横川法語』 *『勤女往生義』

○九九一 具平親王『弘決外典抄』

一〇〇二 法華經二十八品和歌 *東三条院一周忌

詠歌者 藤原公任、*赤染衛門(二人は無常の十喻題でも詠歌)

☆一〇三二 法成寺金堂供養 ☆藤原道長による仏法興隆

☆一〇四〇 鎮源『大日本国法華経験記』

一〇五二 末法第一年

☆ 翌年、平等院阿弥陀堂建立 藤原頼通

一一一〇 *某内親王、法華百座の願主 『百座法談聞書抄』

一一五〇 『久安百首』 釈教題五首(五時教、四要品・心経、五大明王、十住心の末尾五心など)

一二一? 法華経和歌30首(168~197) 藤原忠通『多田民治集』 近衛天皇に献呈

一条天皇の時代は、仏教の三時説でいわれる像法時の最末年のころで、もう末法時の到来まで秒読み段階にはなっていました。わが身の上を訪れることではないにしても、子や孫たちの世代になると末法の世を生きていかねばならないのです。末法の世への備えということで、☆印をつけましたが、源信『往生要集』、慶滋保胤『日本往生極楽記』が著され、藤原道長による仏法の興隆があつて、貴族社会の人々は強く救済を願い、深く仏法に傾斜していったの

です。

先ほども少しふれましたが、源為憲の『三玉絵』が見えます。女性のための平仮名文で書かれた仏教入門書です。西暦一〇〇二年の条には「法華経二十八品和歌」という試みがあります。これは藤原道長が姉の東三条院詮子の一周忌法要に際して詠ませたものです。一〇二二年には法成寺の金堂供養が行なわれました。この法成寺には阿弥陀堂（無量寿院）とか五大堂とか数多くの堂舎が建てられ、壮大な寺院であつたそうです。道長による仏法興隆ですね。一〇四〇年の『大日本国法華経験記』も、天台僧の鎮源が『法華経』の行者の伝記をまとめて、『法華経』の勤修による兜率天往生や極楽往生を勧めたものです。

このような時代相の推移については、次に掲げますような女性の手になる作品の記事によつても確認できます。『蜻蛉日記』中巻の天禄二年（九七二）四月条には、

あはれ、今様は、女も数珠ひきさげ、経ひきさげぬなし、と聞きし時、あな、まさり顔な、さる者ぞやもめにはなるてふなど、もどきし心はいづちかゆきけむ…

とありました。夫婦関係に苦悩する道綱母は推定年齢二六歳、「今様」というのは女性が結婚して出産後、子どもが幼年期を過ぎた、早くて二五歳前後なのでしょうか。『源氏物語』蓬生巻の末摘花は、

今の世の人のすめる経うち誦み、行ひなどいふことは恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もなければ、数珠など取り寄せたまはず。

と消極的だったようです。光源氏が新年立てで二七歳前後なので、末摘花は三〇歳以前かと思われます。しかしながら、どちらの例も「今様は」「今の世の人のすめる」とあるように、すでに多くの女性が二〇歳代のうちから経文を読み習うようになっていたことは確かでしょう。そして、これもよく知られるところですが、『更級日記』の長元四年（一〇三二）、菅原孝標女二四歳のころのこととして、

このごろの世の人は十七八よりこそ経よみ、おこなひもすれ、さること思ひかけられず…

とありました。一七、八歳といえば、結婚するかまだしていないか、とうとういわゆる花嫁修行中に経文も心得ていることが求められるようになりました。

もう一つ表を掲げます。有職故実書の『二中曆』第十三・名人曆・説経によつて、説経の名人のリストを見てみましょう。

賀縁〔阿闍梨〕（座主良源九二〜八五を譲る） 湛然〔同〕

静昭〔法橋〕〔功德院（賀縁の弟子）〕〜一〇〇二 院源〔座主〕九五四〜一〇二八

寛印〔供奉〕（源信の弟子） 源心〔座主〕九七一〜一〇五三

慶意〔律師〕一〇〇六〜六七〔已上山〕（天台宗山門派）

清範〔律師〕九六二〜九九 永昭〔僧都〕九八九〜一〇三〇〔已上南京（南都六宗）〕

源泉〔僧正〕九七七〜一〇五五 維尊〔法橋〕一〇〇八?〜七二

済算〔同〕九九一〜一〇六一 湛円〔阿闍梨〕慶範〔供奉〕九九五〜一〇六一

維明〔阿闍梨〕〔已上三井寺〕〔天台宗寺門派〕

この中で最も早いと思われるのは、天台宗山門派円仁流の賀縁阿闍梨で、座主の良源を譏ったという逸話を遺しており、長徳年中（九九五〜九九九）に智證門徒におかれて三井寺に入ったというので、一〇世紀の後半に活躍した僧でしょう。南都六宗では清範律師で一〇世紀末葉、天台宗寺門派円珍流では源泉僧正で二世紀にはいつてからの活躍です。説経の名人の出現、また継続してほぼ一〇〇〇年間にわたって名人の名が列挙されるところに、像法最末年から末法初年という切実な時代の時代相がうかがえると思うわけです。

三 問題の所在

ようやく『源氏物語』を取り上げる段取りになりました。はじめに、これまで私たちがちよつと気づかなかつた観点を導入してみることにしましょう。鎌倉初期、二二〇〇年ごろに成立した二つの書物、一つは歌論書『無名抄』で、もう一つは物語評論書として知られる『無名草子』なのですが、それぞれに次のような指摘がありました。

まず、鴨長明の『無名抄』（二二二三年頃成）の「仮名筆事」の条を見ますと、

古人云はく、仮名に物書くことは、哥の序は古今の仮名の序を本とす。日記は大鏡のことざまをならぶ。和

哥の詞は伊勢物語ならびに後撰の哥の詞をまねぶ。物語は源氏にすぎたる物はなし。皆これらを思はへて書くべきなり。

いづれも、かまへて真名の詞を書かじとするなり。心の及ぶ限りはいかにも和らげ書きて、力なき所は真名にて書く。

それにとりて、撥ねたる文字、入声の文字の書きにくきなどをば、捨てて書くなり。万葉には、新羅をば「しら」と書けり。古今の序には、喜撰をば「きせ」と書く。これら皆その証也。

詞の飾りを求めて、対を好むべからず。わづかに寄り来るところばかりを書くなり。対をしげく書きつれば、真名に似て、仮名の本意にはあらず……

とあります。「古人云はく」というのですから鴨長明の見解ではなくて、だれか先人の説のようですが、注目すべき第一点は、平仮名文（和文）の文章には四タイプあるという指摘です。そして、「哥の序」を書くには『古今集』の「仮名序」が手本となる、「日記」なら『大鏡』の内容や表現を見習う、「和哥の詞」は『伊勢物語』と『後撰集』の詞書きを真似ればよい、「物語」は『源氏物語』にまざる手本はない、というのですね。「日記」は『大鏡』というのが少し引つかりますが、まあよいとして、「和哥の詞」は家集の歌の詞書きや紀行文学風な文章なのでしょう。なかなか鋭い観察ですね。

第二点としては、和文では「真名の詞を書かじ」、すなわち漢字・漢語を使わないようにと誠めています。なるべく和語で表現して、固有名詞などでさえ平仮名表記がよくて、撥音尾など仮名の表記法が定まっていないうちは「捨てて書く」先例があるとして、対句も抑制するのです。『古今集』のころには、「シ」にあたる文字がなかったので、「し

んら」とか「きせん」とか書けなかつたのです。「ん」らしき字はありましたが、「ム」か「モ」を表していたようです。「撥ねたる文字」「入声の文字」などとありますが、後に具体例を挙げることにして、ここではごく簡単に説明しますと、現代の表記で言えば「ん」の文字、小さい「つ」や小さい「や、ゆ、よ」、また漢語の発音に必要な「くわ、くぬ、くゑ」の表記が平安時代には定まっていなかつたのです。そんなことでは、平仮名文で仏教漢語を表記したり、経文や仏教故事を引用したりすることができるのでしょうか。

次に、『無名草子』（二〇二年成）の「捨てがたきふし」の一つとして挙げられる『法華経』の条を見ますと、

など、『源氏』とてさばかりめでたきものに、この経の一偈一句おはせざるらむ。何事か、作り残し書き漏らしたること、一言もはべる。これのみなむ第一の難とおぼゆる…

とあります。じつは、『源氏物語』には仏教語も仏教故事もいくらでも出てきますし、経文をふまえた表現だつてあるのですが、このように指摘されてみると確かに、光源氏も薫大将も『法華経』の一節を口に唱えている場面は存在しないどころか、『枕草子』にさえ見あたりません。これはどういふことなのでしょう。

先に結論を申しますと、このころにはまだ女性が人前で漢詩文を詠じたり、経文を誦したりすることが憚られていたからなのだと思います。こざかしいというのか、生意気だというのか、女性差別も甚だしいことですが、私が思うには、じつは女性にも中国の故事や漢詩文についてある程度の知識が必要であり、これを和語、和文で言い表すのが女性のたしなみとされていた、というのが実態であつたのではないのでしょうか。本質的には同じことではないかと評されるかもしれませんが、女性におけるこの制約はちょうど平仮名文においても設けられていた、男性も平

仮名文を書くのならこの制約に従わなければならなかった、とすれば皮肉にも男性をも縛っていたことになりませぬ。

『源氏物語』の成立した時点では、清少納言のような漢詩文の訓読文をそのまま口にすることが非難されましたが、『源氏物語』の場合は語り手が女性であっても、登場人物の男性が詠じていることだからうじて許容範囲に収まっていた、経文についてはいつそう厳しい制約が存在していたという風に想像されるのです。

四 『源氏物語』の漢詩文の表記と『狭衣物語』の経文の表記

和文に漢語は似合わないという意識が長い間続いてきた、古くは女性は人前で漢詩文を詠じたり経文を誦したりしなかった、とお話してきました。しかし、もう五〇年もすると末法の世になる、だからこそ仏教による魂の救済が求められ、仏法の興隆が計られる時代になっていた、とも申しました。

このような時代相の中で作られた和文の物語には、それぞれに時代の推移を刻印するような、何かしかるべき痕跡が見られるのではないのでしょうか。そこで、一〇〇八年前後の成立と考えられる『源氏物語』と、一〇三〇年ごろとされる『栄花物語』正篇（鶴の林巻までの二〇巻）、後れて二〇七〇年ごろに成った『狭衣物語』の三作品を見比べてみることにしましょう。

あらかじめその結果の要点を申しますと、『源氏物語』には仏教語も仏教故事も見られますが、経文の直接の引用はありません。女性作家の手になって、経文の文言を引用して記載されるようになるのは『栄花物語』の法成寺グループの巻々と呼ばれる辺りからと見られ、『狭衣物語』では狭衣大将がしばしば『法華経』の一偈一句を口ずさ

んでいて、用例は多数にのぼります。とはいえ、三作品とも院政期以前の写本は存在せず、いずれも最も古くて鎌倉時代の後半まで降る写本ばかりなので、ここでは鎌倉時代における表記はどうなっているのかということで見えてまいります。

① 『源氏物語』ですが、仏教語や仏教故事がどのように表記されているのかを見ることは後回しにして、ここでは参考となりそうな漢詩文の訓読文の表記について掲げてみます。順に光源氏、夕霧、豊後介が詠じています。次が② 『栄花物語』鳥の舞卷の一節で、法成寺の諸堂を巡礼する尼の筆記という体裁になっています。③ 『狭衣物語』では、すべて狭衣が経文を誦している場面です。

① 『源氏物語』の漢詩文の表記 鎌倉期書写の伏見天皇本（伏）、尾州家河内本（尾）

a 二千里外故人心（伏）、二千里のほか故人の心（尾）（須磨卷）

『和漢朗詠集』秋・十五夜付月・白居易

b 右將軍がつかに草はじめてあをし（尾）（柏木卷）

『源氏釈』所引詩「右將軍塚草初秋」

c このちのせいじをばむなしくすてくつ（尾）（玉鬘卷）

白居易・新樂府・縛戎人「胡地妻兒虛棄捐」

② 『栄花物語』鳥の舞卷の経文引用 鎌倉期書写の三条西家旧蔵本

かの法華經の序品に「及見諸仏、此非小縁、これおぼろけの縁にあらず」と見えたり。

③ 『狭衣物語』の『法華經』引用 鎌倉期書写の西本願寺旧蔵本（深川本とも）

a 我爾時為現、清淨光明身（卷一） 法師品「同上」

b 是人命終、たうしやうたうり天上（卷一） 勸発品「是人命終、当生忉利天上」

c かい女こんじき、修あびごく（卷三） 序品「皆如金色、從阿鼻獄」

（女ニヨ、修シユ は拗音の類音表記で、仮名に準じる）

これを見ると、漢詩文が訓読されて口ずさまれていたことと、『法華經』は解説されることがあるので、おそらく音読、訓読、和語による要約ないし意訳のあったことが見当つきます。それよりも興味深いことは、漢詩文も経文も三通りの表記が見られることで、aの場合は原漢文のまま、bでは始めの二〜四文字が漢字であとはおおむね平仮名、cはすべて仮名書きです。これは私の想像ですが、院政期の元のテキストでは漢文に仮名書きの訓読文を併記していて、鎌倉期になってこれを書写する段階になると、一々に両文併記するのは面倒くさいので、ある箇所は仮名書きとし、別の箇所は漢文表記にするという取捨選択がなされた結果なのではないでしょうか。bの始めの数字だけを漢字で書くのは、新しい表記上の工夫だったと思われまます。多くの場合、出典は『和漢朗詠集』や『法華經』の句だったでしょうから、bやcのように仮名書きしても比較の見当がつけやすかったのかもしれない。

いま、院政期には漢文・訓読文併記の方式があったと申しましたが、これについては後に『源氏釈』で実例をお見せいたします。院政期にはまた『伴大納言絵巻』『信貴山縁起絵巻』など、すぐれた絵巻物がたくさん制作されておりますが、絵巻の詞書は平仮名文で、漢字書きの文字には振り仮名を付けることも行なわれていました。高貴な方に献上する目的で作成された書物には、漢字書きには振り仮名を、仮名書きには振り漢字を付けるという心配りがあつたと考えてよいと思います。私としては、これを紫式部や赤染衛門の時代までさかのぼらせて想定してみたいのですが、まだ何ともいえないのが残念です。

五 和文における字音語や仏教漢語、音便形の処理

少しだけですが漢語(字音語)が出てきたところで、平安時代撰関期の平仮名文における漢語や音便形の表記がどうなっていたのかを見ておきましょう。簡便な表を作ってみました。

和文における字音語・音便形の表記 前出が原表記、後出は参考、仮名には濁点を付す

*は紀貫之『土左日記』の漢字表記や仮名表記

撥音尾 …… *願ダワン、*白散ビヤクサン、*明神ミヤウジン、*院ヤン

類音表記… 千セン

無表記 …… *さうじもの精進(物)、*もじ文字、*ゑず怨ス

撥音便の無表記… *しゝこ死ンジ子

きせ喜撰、しら新羅

入声尾の表記 … せうそこ消息、だいとこ大徳、はかせ博士（同音の母音を添える）

拗音 … *京キヤウ、*中将チユウジャウ、*白散、*明神

類音表記 … 経キヤウ、修シユ、女ニヨ、

直音表記 … さうじ請シ、すけ出家、*ばうざ病者

合拗音とその類音表記 … *願グワン 化・火クワ、鬼クキ

促音便の無表記 … よて因ツテ、おもて思ツテ、こぞて挙ツテ

ウ音の無表記 … まし申マウシ、まで詣マウデ

表の見方ですが、『紀貫之の『土左日記』』（九三五年頃成）は現存しませんが、かつて貫之自筆の本があつて、これをそっくりそのまま書写したという写本が何点か遺つています。それによると、撥音尾とある「ン」の音を含む「願」「白散」「明神」「院」はすべて漢字書きで、仮名書きの「さうじ精進」「もじ文字」「ゑす怨ズ」では「ん」の仮名が無表記です。拗音の「京キヤウ」「中将チユウジャウ」も漢字です。漢語を漢字表記してくれるのは読みやすくなつて助かるのですが、漢語が仮名書きされると困るのが、撥音尾、促音便、ウ音の無表記と拗音の直音表記などです。『土左日記』

では「はうき」が難しく、歴史仮名遣いと濁音付きの「びやうじや」なら見当がつくかもしれません。「すけ出家」「おもて思ッテ」「まし申シ」など、読み解くのに苦労しますね。先ほどの『無名抄』には「きせ喜撰」「しら新羅」が例として挙げられていました。

それが、ようやく院政期から鎌倉時代のころまで降ると、仮名表記にも工夫が見られるようになって、「ん」「つ」「う」を書いたり書かなかつたりするまでになりました。そうはいっても、字音語を平仮名ばかりで書かれたら簡単には読めなくて、漢字が思い浮かばないのではないのでしょうか。平安時代摂関期から院政期にかけて、さすがに平仮名文にも固有名詞や官職名などを漢字で書くこともあるように移り変わってきました。では、『源氏物語』の段階では仏教語や仏教故事はどのような表記になっていたのでしょうか。

六 『源氏物語』の仮名書きの仏教語

『源氏物語』の最も古い写本は鎌倉時代の後半にまで降ると申しましたが、じつは古写本でなくても、ごく一部分の表記ならもつと古い写本の本文の知られる例があります。それは鎌倉時代の河内方の源氏学者素寂の注釈によるものです。素寂の著した注釈書は『紫明抄』（二二九〇年頃成。紫）と言いますが、それより早く編者未詳の諸注集成である『光源氏物語抄』（異本紫明抄とも。二二六七年以後。光によつてもうかがえます。素寂は天台宗の僧であつたらしく、『源氏物語』の仏教方面の典故研究で多大な貢献をしております。その一つが仮名書きの仏教語に漢字を宛てることでした。ここでは、『光源氏物語抄』橋姫く椎本卷（五ノ二オく二オ）から用例を挙げてみますと、

仮名書きの仏教語に漢字を宛てる——素寂の貢献 濁点を付す

蓮のうへに…にこりなき池にも…(極楽世界、七宝華池)

和語和文

ないけう(内教)

ぞくひじり(俗聖人)

「ひじり聖人」は和語表現

すけの心ざし(出家志)

うばそく(優婆塞)

しうとくのそうづ(宿徳僧都)

いむ事(戒)

「忌むこと戒」は和語表現

扇ならでも月はまねきつべかりけり(月隱重山兮擎扇喻之…)

和語、会話文

ふせ(布施)

あざり(阿闍梨)

さうじおろして(請下)

聖だつ迦葉も…たちてまひ侍りけむ…(経云、香山ノ大樹緊那羅…) 和語、会話文

さんまい(三昧)

だいとくたち(大徳)

御ねんずのぐ(御念誦具)

となります。院政期か鎌倉初期の写本というか素寂の見た本には「ないけう」「すけ」「うはそく」「ふせ」「さんまい」「ね

んす」など、仏教漢語が仮名書きであったのですね。「ひじり」「いむ事」は仏教語の和語表現です。極楽のさまとか、扇（正しくは団扇でしょうか）を月に見立てるとか、音楽に浮かれて舞った迦葉のこととか、故事に類することは和語和文で表現されていて、それを素寂が漢字漢文で注釈を施しています。

念のため申しますが、「蓮」「聖だつ」「迦葉」が漢字で書かれていたかどうかまでは分かりません。また、『光源氏物語抄』は江戸前期の写本、『紫明抄』の最善本は鎌倉末期の書写といいますが、ここで取り上げた例は素寂が見たはずの『源氏物語』の本文であって、かつ早く『光源氏物語抄』にも採用された項目なので、鎌倉中期に存在した多くの物語本文の実情を示していると考えてよいでしょう。

このような表記の実例に向かい合ってみると、紫式部の時代にはすでに仏教語が日常生活の中に深く入り込んでいて、場面や状況さえ了解していれば、たとえ仏教語を仮名書きしても通じ合えるほどであったと言ってもよいのかもしれません。ほんとうは、漢字書きするなら振り仮名を、仮名書きするなら振り漢字を付すとよいのですが、平仮名文には意識的な制約があったため、また手間を惜しんだため、現代の目から見れば中途半端なかたちになっているのでしょうね。

七 『源氏物語』の鎌倉期写本の仏教語表記

引き続き、今度は実際に『源氏物語』の鎌倉期の古写本では仏教語がどのように書かれていたかを見てまいりましょう。

鎌倉期古写本の仏教語表記

(光)、(紫) ほか、東山御文庫蔵各筆源氏(各)、保坂本(保)、尾州家河内本(尾)

〈〉内はミセケチの字、()内は右傍に施した訂正の字

「」内は傍記、振り漢字、振り仮名

法華三昧(若紫卷) (光尾) 法花三昧、(紫) 法華三昧、(各) ほく〈糸〉(け) 三まい

優曇華(若紫卷) (紫各尾) うとむ花、(光) うとむけ

普賢菩薩(未摘花卷) (光) 普賢菩薩、(紫) ふけんほさち、(尾) ふけむほさち、(各) ふけむほさち

迦陵頻伽(紅葉賀卷) (光) 迦陵頻伽、(各尾) かれうひんか「迦陵頻伽」、(紫) かれうひんか

法界三昧普賢大士(葵卷) (光紫尾) 法界三昧普賢大士、(各) ほうかい三まいふけむたいし

釈迦牟尼仏弟子(須磨卷) (各尾) 釈迦牟尼仏弟子

仁王会(明石卷) (光各) 仁王会、(尾) にんわうゑ「仁王会」、(紫) にんわうゑ

最勝王経(若菜上卷)

(保) 最勝王経「さいせうわうきやう」、(各尾) さいせうわう経、(光紫) さいせうわうきやう

不動尊(若菜下卷) (紫) ふとうそん「不動尊」、(各) ふとうそん、(光保尾) ふとうそむ

摩訶毘盧遮那(若菜下卷)

(紫各尾) まかひるさな「摩訶毘盧遮那」、(光) まかひるさな「摩訶毘盧遮那」、(保) まかひるさな

目連(鈴虫卷) (尾) もくれん「目連」、(光紫保) もくれん、(各) もくれ

無言太子(夕霧) (光紫各) 無言太子、(尾) 無言太子、(保) むこんたいし

阿難(紅梅卷) (紫各保尾) あなん

迦葉(椎本卷) (光) 迦葉、(紫) かせう「迦葉」、(各尾) かせう、(保) かせそ

常不輕(総角卷)

紫 常不輕、(各) しゃうぶ経、(保) さうぶ経、(尾) さうぶきやう、(保) ふきやう

薬王品(東屋卷) (保各) やくわう品、(紫) やくわうほん「薬王品」、

(尾) やくわうほん、(光) くわうほん

牛頭梅檀(東屋卷)

(尾) 五つ千たん、(各保) 五つせんたん、(紫) こつせんたん「牛頭梅檀」、(光) こつせんたん

私が恣意的にピックアップしたのですが、表の見方について説明しますと、若紫巻の「優曇華」は(紫各尾)では「うとむ花」(光)では「うとむけ」になっており、紅葉賀巻の「迦陵頻伽」は(光)ではそのまま漢字、(各尾)では「かれうひんか」と書いて右傍に「迦陵頻伽」と振り漢字、(紫)では仮名書きです。

全体をまとめてみますと、やはり仮名書きの例が圧倒的に多いようです。しかし、「仁王云」「摩訶毘盧遮那」「目連」など仮名書きに振り漢字を付したものもあります。やはり漢字表記を添える必要を感じているのですね。また、少ないながらも、「法花三昧」「釈迦牟尼」「無言太子」など、漢字表記もありました。ここでは一例だけのようですが、「最勝王経」と漢字書きで、右傍に「さいそうわうきやう」と振り仮名を付けた例もありました。ちなみに、「常不輕」「しゃうぶ経」の「経キヤウ」が拗音の類音表記、「牛頭梅檀」「五つ千たん」の「千セン」が撥音尾にかかわる

類音表記です。

紫式部がどう表記したか、女主の中宮彰子に献上した本にはどう書かれていたか、まったく分かりませんが、鎌倉時代まで何度も書写され続ける中で、平仮名の表記だけでは意味が汲み取りにくいことは十分意識されてきて、漢字表記（に振り仮名）、仮名表記に振り漢字というかたちも生じたことは間違いないでしょう。

ここまで、特に第六節、第七節にわたって、平仮名文における字音語の表記といったほんとうに些細な問題にこだわって見てきましたが、じつは私はこのところずっと和漢混淆文の成立ということに取り組んでいまして、それで、平仮名文においても漢詩文や経文などの原文や訓読文を取り込まない限り、深い思索を展開することはできないはずである、どうして簡単に漢字漢文を取り込むことができなかつたのだろうか、では片仮名文なら容易に成し得たはずなのかとか、あれこれ考えておりました。そういうわけで、平仮名文については『源氏物語』を試金石にして、その享受史、研究史を振り返る中で表記の問題を考察してみましたということです。

八 冷泉家時雨亭文庫藏鎌倉末期写本『源氏積』（積冷）の表記

最後に、『源氏積』についてあれこれ考えてみることにいたします。『源氏積』の興味深い点は最初の『源氏物語』の注釈書であるということにあつて、まず物語の本文表現の典故となつた漢詩文や仏教故事などが指摘されていること、そのため著者である藤原伊行の仏教についての知識が推し量れること、さらに後々の注釈書にもかならず引用され続けたので注釈本文の表記の異同をうかがうことができ、その原態を推察することが可能なこと、という恵まれた環境にあると思われるのです。

さつそく、幾つか際立った事例を見ていくことにしましょう。テキストとしては冷泉家時雨亭文庫蔵の鎌倉末期写本を使用いたします。この本の体裁がそもそもの原態をよく伝えていると考えられるのです。はじめは、中国故事の指摘において、人名などの固有名詞を漢字表記とし、これに振り仮名を附した例です。

① 桐壺卷「唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れ…」*□右傍の文字は推読 句読点・濁点を付す

もろこしに玄宗皇帝と申込みかどおはしけり。楊玄暎といふ人のむすめ、楊貴妃といふ、さまあしき程におぼしめして、よのまつりごともしたまはず。楊貴妃のせうとに楊国忠といふ人に、世のまつりごとをまかせて、すてさせ給に、よのみだれ、なげきとす。ときに安祿山といふ人の、いかりをなしていくさをこして…

これなど、院政期末期に制作された豪華絵巻の詞書の表記（多くは片仮名書きの振り仮名ですが）といつしよ、『源氏釈』がおそらく高貴な女性に献上された注釈書であることをよく示していると思つたのです。

次は、漢詩文に訓読文を併記した例です。

② 末摘花卷「三つの友にて、いまくさや…」*「」内は割注、小字右寄せ

琴詩酒友皆抛我

雪月花時 尤憶君〔白居易作〕

訓読文そのものではなく、漢字に振り仮名を付すというかたちで、テニヲハを整えて訓読文としているわけでした。至れり尽くせりで、ほんとうに親切ですね。

次がまたおもしろくて、仏教故事を説明するにあたって、変体漢文の文章に訓読文を併記した例となります。

③ 紅梅卷「仏の御なごりには、阿難が光放ちけんを…」

しやかほとけねはんのち あなんのほりてうざにけつじゆするしよきやうを
釈迦仏涅槃之後、阿難昇高座結集諸経
とき、かたちとしほとけの よてしゆ系の ふた、びいで給 うたがひ
之時、形如仏。仍衆云、仏再出給かと疑申。

わざわざ変体漢文を書いておいて、これにはほぼ総振り仮名を付しています。もし伊行がこの注釈を自分で作成したのなら、はじめから①のようなかたちで、振り仮名付きの漢字交じり平仮名文で書いたに違いないと思うのですが、いかがでしょうか。そもそも、この漢文は経文など仏典からの引用ではありません。伊行が師の僧に問い合わせた結果、師僧が結集の故事を要約して漢文で書いてよこした勘文なので、伊行はこれを訓読して振り仮名を付けた、と見るほうが説明しやすいと思います。

紅梅巻のこの阿難の故事について、後々の注釈書に引用された例も見てみましょう。

『源氏釈』前田家本（釈前）

釈迦仏涅槃の後、阿難高座にのぼりて、結集諸経、其形如仏。よりて仏の二度よにいで給かとうたがひき。

『奥入』定家自筆本（奥定）

釈迦仏涅槃之後、阿難昇高座、結集諸經之時、其形如仏。仍衆会疑仏再出給。

『紫明抄』（紫）

釈迦如来涅槃之後、阿難昇高座、結集諸經之時、其形如仏。仍衆会疑仏再出給。

『河海抄』（河）

大論云、尺迦仏入涅槃之後、阿難登高座、結集諸經之時、其形如仏。仍衆会疑仏再出給。

（釈前）は、全体としては漢字・平仮名交じり文で、部分的には漢文表記のままです。どちらが手間がかかるかといえば、先に漢文を書いてそこに総振り仮名を付けるほうが面倒です。（釈前）になると、たぶん漢文・訓読文併記のさまを見て、手間の省ける訓読文に書き換え、途中でつい漢文のみを写し、反省してまた訓読文にしたという風に、書写した人の心の揺れまで見ることができません。（奥定）は漢文表記でごく一部に片仮名の附訓を施し、（紫）は漢文表記のみですね。これらは、必要な範囲内で片仮名により訓読みを残したとか、訓読は必要ないと無視したとか

いう風に説明されます。(河)には「大論云」とありますが、『大智度論』卷二に結集の故事が載っているということを描しただけで、実際は『源氏釈』の引用です。

以上、繰り返しになりますが、藤原伊行は仏教故事などの注釈は師僧による勘文に頼っていること、漢詩文や仏教関係の漢文を引用する時にはかならず訓読文を付していること、後々の注釈書になると『源氏釈』の訓読は取捨されること、などを見てまいりました。「紫式部と仏教」というような本格的なテーマではなく、『源氏物語』と「仏教」ということで、ほんのささやかなお話をさせていただきましたが、何かのご参考になれば幸いです。ご静聴ありがとうございました。